



人間性を秘めた音楽が見せる風景

宮本笑里

(ヴァイオリニスト)

数々の新しい試みを世に投げかけ、
現在に至るまで人々の賞賛を得ているベートーヴェン。
同様にヴァイオリンの可能性を追究し続ける宮本は、
その人間性に親しみと魅力を感じるという。かつて家族と過ごした
ドイツの風景を思い浮かべながら語ってくれた。

今年一月、ドイツ政府観光局主催のベートーヴェン生誕二五〇周年記念コンサートで、ピアニストの梯剛之さんとヴァイオリン・ソナタ第五番『春』第一樂章をご一緒にしました。非常に短い時間でしたが、梯さんが私の音を緻密に聴きながら受け入れてくださったので、初共演とは思えないほど違和感なく演奏することができました。人の相性なのか楽器の相性なのかわかりませんが、これ以上ない形でベートーヴェンを表現できたと思います。

『春』はタイトル通り爽やかな春風を感じられる、普段あまりクラシックを聴かない方でも入りやすい作品です。しかし私のような演奏者にとっては、ベートーヴェンが專業のヴァイオリニストではなかつたからか、やや弾きづらいと思うような箇所がちりばめられているとも感じます。数年前にサントリーホールでベートーヴェンを演奏したときは、とにかく楽譜に忠実な演奏を心がけていました。もちろん自分なりの表現を試みましたが、より正確に弾くべきという意識が強かつたわけです。

すると今度は技巧面ではない、楽曲の背景にある人間の本質みたいなものを掘り下げないと、いっさい難しさにこそ、ベートーヴェンの魅

力や人間性が詰まっていると言えます。彼の歴史や生きてきた軌跡を勉強して、楽曲に込められた想いを汲むことで音の出し方、表現の方法が大きく変わってくると思うんです。フォルテの出し方ひとつをとってもそうで、闇雲に強調したところで伝わることは少ないでしょう。

より身近な天才

私は、父がオーボエ奏者だった関係で生後もなくから小学校に上がるまでケルンで育ちました。その後日本に帰国して、再び渡独。中学時代をデュッセルドルフで過ごしました。

小さいころ、ヴァイオリンを持つてドイツの街を歩いていると、通りすがりの方が「ヴァイオリンやつてるんだね。頑張ってね」とよく声をかけてくれました。クラシックの演奏をするストリートミュージシャンもたくさん見かけましたし、それがベートーヴェンのヴァイオリン曲だつたことも多かつたと記憶しています。そ

ともよくありました。幼少期には何の曲かわからぬなか、そうやって父が細かく教えてくれましたので、自分の中でもベートーヴェンがどんどん身近な存在になっていきました。

同時代に天才と呼ばれた作曲家に関して言えば、モーツアルトは作曲のスイッチが入ったら紙の上に一笔書きみたいな感じでペンを走らせて、一度も間違えずに採譜したと伝え聞きます。少し遡って、バッハにしても数学的で完璧に計算された楽曲を手がけています。たとえば「逆から演奏してもいい曲に仕上がっている」みたいな逸話があるように、一人とも「完璧な天才」然とした先人たちです。

対してベートーヴェンは交響曲第九番第四樂章『歓喜の歌』を作曲するにあたって、そのテーマを生み出すのに何度も採譜し直して、何ヵ月もかけて作り上げたというエピソードを聞きます。その違いに象徴されるように、ベートーヴェンの人間味にはホツとするところがあります。

私自身が作曲をするときも、膨大な時間をかけて書いては消して、消しては書いてというふうに創作しています。全然レベルが違う雲の上の存在ですけれど、そんな場面でもベートーヴェンに共感を覚えます。

ベートーヴェンの何々だよ」と教えてくれること